

芥川だより

発行日 *** 2013年5月1日

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

梵

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL072-681-8870

一部 50 円です



村祭り

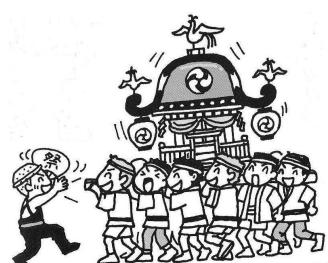
村には神輿がなかった。小さな神社があつて春と秋には祭りがあつたのだが神輿らしきものはどこにも見当たらなかつた。私が小学生になって同級生の家に祭りだからと誘われて遊びに行った村には大きな神輿があつて、大人たちが勢いよく担いでいた。その様子をみてどうしてわが村には神輿がないのだろうかと不思議に思ったものだ。

氏神様に参る、ただそれだけが村の祭りの行事なのであつた。神輿も太鼓も何もない殺風景な祭りである。村の氏神さまには、小さな社殿と脇に舞台を備えた板間の小屋があつた。小屋の中には大きな囲炉裏が掘られていて、まつりの時など大人たちが板間にムシロを敷いて囲炉裏で火を燃やして持参した煮しめを肴に酒を飲んでいた。

先日、友人が出演するからと誘われて、バッハのミサ曲を聴きに行った。大きなコンサートホールで奏でられる楽曲に荘厳の趣はあつたが、音楽にとんと興味のない私には退屈気味であった。演奏を楽しむということはできなくとも出演者の熱心な思いは伝わってきた。音楽に疎い私は聴き入って味わうということを知らないためか、ただ聴きながら退屈しのぎに文化と言うものについて思いをめぐらした。文化といわれるものは、金とヒマがなければ生まれないとと思う。わが村は、文化を生みだすにはあまりに貧しかつた。人も少なく余裕も無かつたのだ。

神輿のあつた友達の村は戸数も多く金もあつたに違ひないが、それだけではないはずだ。村人の中に神輿をみんなで担ぐことによって、村人の心を一つにまとめ活力を生み出す文化の力を知り、村の更なる発展を願つた人達がいたにちがいない。金をかけて神輿を作り神に奉納する祭りに村人のまとまりをかけたのだ。神事に限らず文化が持つ力とは人を集め人に元気を与える事なのだ。

私が入院中に多くの方々から、見舞いや励ましをもらい元気になったのも「芥川だより」を発行していたからである。ささやかではあるが、この「芥川だより」も小さな情報発信の文化である。このミニコミ誌を媒介として人々が心を寄せ元気を感じていただければ嬉しい。(嘉)



昔の貴族は糖尿病で亡くなる人が多かつた、と本で読んだ事がある。

先日、麻生副総理が「好きなだけ飲み食いし糖尿病になつた人の治療費を税金で払うのは如何なものか」と発言しているが、私も自分の不摂生を棚に上げて言えば同感である。

入院中、同部屋の人は私以外、全て糖尿病の患者であつた。彼らの悩みは、糖尿と言われる、極めて少量の味気ない食事であった。血液検査と日に7回の血糖値検査で食べたものが直ぐ検査結果に出る始末で、人目を忍んで食べる訳にはいかない。

私も、服用していた薬の副作用と、病院食の少なさの為か、非常に食欲が強くなつて病院のレストランへ通つていた。当然の結果として、肥満が進行し、今も医者から糖尿だ、肝炎だと脅かされている。

目の前に食べ物があつて食べられないのは、無くて食べられないよりも辛いだろうと思う。私の軟弱な精神力では、到底辛抱が出来ないから、目につく處にあるものは、無くなるまで飲み食いするにちがいない。

爺捨て山ではそういうはいけない。無くては食べられないからだ。

梵店主

連載 爺捨て山 45

クラス会で

想い出話をするには同じ時代を生きた人同士に限る。年々欠けてゆき、残っている人も、私も記憶があいまいになり、耳も遠くなり、話が進まない。そんなことあつたか知らんよう覚えとつてやつたなア、という。

ボケてきたのか、まだらボケなんか。それに勝手に話に花が咲いてゆく。それが楽しく、又一年たつたら、クラス会。

私もその頃は、ヤンチャだつたらしい。担任の先生に、アダ名をつけ、暗号のように生徒が楽しんでいたらしい。

いまだ覚えているのが、タヌキ、動物の名前、顔にあつているのだから仕方がない。タヌキの先生は知らんのだから面白い。教室へ来る足音がすると、「タヌキが来た」と合図がある。いつせいに静かになる。

クラス会でそんな話をしても、あそう、そんなことあつた。先生も感じていたのか同じ人を廊下に立たせていた。

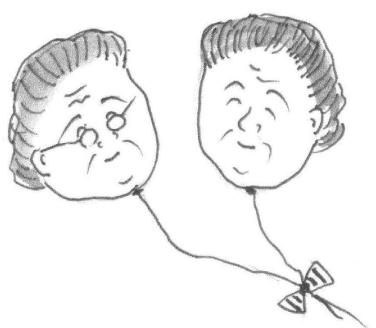
教室でも先生の話なんか聞いていないのだから。きっと常習犯にされたらしい。

「廊下に立たされるのは、いつも自分がかりや」叱られ役、廊下に立た歩く。ぞろぞろと行き交う人、その人た

ちが手にしているのが、ケイタイ電話、前に突き出して高く上げている。

「何しているのや」「知らんよ」孫は言う。息子が振り返つて「こんな人混みの中でしゃべつたら、またこけるで」と言う。ああ疲れた。

家でねころがつてテレビでも見ているのが正解だつたわい。やつと見知らぬ店の前へ着いたら、その時はじめて笑顔を見せた。



俳句

土田 裕

うなだれて人待つさまに君影草

街を行く乙女の美しき薄暑かな

木陰ばかり選びて歩く立夏かな

土つけて筍つつむ新聞紙

遠き日や摘みては食みし草苺

編集後記

五月晴れの日々が続き、陽気もよくて、私の体調も気分も上々で皆様に感謝しております。

ありがたいことに、友人たちが、何かと気配りをしてくれて、色々なところに連れ出して楽しませてくれます。

昨日は、大阪・食博へ行き世界の食べ物を見て、ドイツのビールを堪能してきました。アルプス楽団のソプラノ

歌手がジョッキ片手に歌う乾杯のドイツ民謡を聴きながら、ドイツの酒場を思い出しました。

大阪駅北側に新しく出来た商業施設グランフロントのバーや中華料理も食してきました。案内してくれた友人は

「まあ、三年やね」「そうか、三年で閑古鳥が鳴くか」そんなやりとりをしながら、私は、昔の鳴り物入りでオープ

ンした「つかしん」の事を想つた。

ああ美味しかった。

美人医師

梵店主

指定のあつた7月20日、よつちゃんは、大学病院へ行き、入院受付で手続きをし、指示された病棟の12階にあるナースステーションへ行き名前を告げた。

すぐに看護師が対応してくれて、ステーションの真向かいの病室に案内された。

四人部屋の廊下側のベットであつた。

よつちゃんは、一瞬「えつ、間違つてやないか」と思った。個室の良い部屋に入院させてもらえるという先入観があつたからだ。

家内いわく、「個室だと気が変になるらしい。相部屋だと話し相手もできて、楽しく入院生活ができるのよ」という。家の知り合いの主人が個室に入院していた為に、奥さんは毎日、旦那の話し相手を何時もさせられ困つたという。このことを理由に家内は相部屋に可愛いらしく女のお子がいた。看護師が病棟でよつちゃんを担当する医師だと紹介された。外来でよつちゃんを担当した医師と入院患者を担当する病棟医師は違うのだと入るとかなりの違和感を覚えた。

しかし、気持ちの切り替えの早いよつちゃんは、ものは考え方だと考え直しました。この狭いベッドの空間は、山のテン

らず、風も吹かない。氷点下になつて凍えることもない。二十四時間、若い看護師と天國みたいなどころなのだ。そうだ、きっと天國なのだ。よつちゃんの気持ちは、相部屋の息苦しさを山登りの生活を思い出すことによって、難なくクリアしたのである。

医師が介護してくれる。もちろん怖い先輩もいなければ、仕事の心配もしなくてよい。催促の電話もかかつてこない。

医師が介護してくれる。もちろん怖い先輩もいなければ、仕事の心配もしなくてよい。催促の電話もかかつてこない。

医師は、よつちゃんの病状について聞いてきた。よつちゃんは、ハイテンションになつた気持ちを抑えきれず、ある事

と天國なのだ。よつちゃんの気持ちは、相部屋の息苦しさを山登りの生活を思い出すことによって、難なくクリアしたのである。

医師が介護してくれる。もちろん怖い先輩もいなければ、仕事の心配もしなくてよい。催促の電話もかかつてこない。

医師は、よつちゃんの病状について聞いてきた。よつちゃんは、ハイテンションになつた気持ちを抑えきれず、ある事

しかし、病気に対しても限りなくブルー、いや開き直つた灰色であった。病名は

何とか見当がついたが、その先是全く見え

ず、大学病院といえども、よつちゃんにどうしては信頼するにあたいしなかつたのである。

よつちゃんが、案内されたベットで寝てみると、担当する看護師が挨拶に来た。「これから、担当医師と今後の治療計画について説明がありますから、別室に来て下さ

去年から、阿波座駅そばに、大型マンションの建設が進んでいて、NHKの朝ドラ「カーネーション」の主役を演じた尾野真千子が「あわざ、ええやん」などとつぶやく宣伝もあつたから、ご存じの人もいるかもしれない。「大阪のビジネスの中心地、本町からひと駅、歩いてすぐの場所に、緑豊かな鞠公園が広がつて、散策にぴったり」。

よつちゃんの気持ちは、病気がどうなるか分からぬ開き直りから、この先生の話は、よつちゃんは、ベットから起きて、相談室へ行くと若い細身の小柄ななら結果がどうなるとも、言われる事は素直に聞かなければならぬと、不思議にも自分に言い聞かせたのである。この医師は、よつちゃんの思つた以上の才媛であった事が、後に同僚の医師の話か

て、散策にぴったり」。

ま、うそじやあないけど、阿波座はそぞういう「ええやん」なときと、「なんじや、こりやあく」と叫びたくなるとき、二つの顔を持っているのだ。「阿波座に何が？」と思つてくれた、アナタ。今から読むことを口外しないと約束していただきたい。でないと、私、南港に無残な死体となつて浮かぶかもしれないから。善良な一般市民の変死体であつても、警察は調べもせず犯人もあげない

可能性がある。犯人というか、犯人の所属する団体とことを構えたくないからだ。しかも、私の命だけではすまづに、掲載した「芥川だより」の編集長にも迷惑がかかるかも。

うそだ。冗談だと思う人は、「アレ」を知らない人たちである。阿波座は、「アレ」の集積地というか、活動の地といったらどうか。「アーネ」とは、そう、右翼。

丸とか付けて、車の窓ガラスは濃い黒で、中を見えなくしてあるんだけど、たまに乗ってるおっさん、兄さんが見える。これがはつきり言って、首が太い、いかにも格闘技が何かをしていそうな、民間人とは一線を画した風情の「こわい人たち」。

一人や二人、街宣車の一台や二台なら、いいんです、この年だから、こわいとも思わない。だけど、阿波座は「集積地」。いざ、出陣してこられますと、三〇台ぐらいは連なるのだ。数えてないから正確にはわからないけど、ズラズラズラーッと大音響の街宣とともに、同じ場所をしつこく、あざとく、グルグルグルグル。こわいよ、うる

も何故か音程の外れたような、聞き苦しい音を流して、大音響で演説だか罵詈雑言だかわからぬ言葉を浴びせる。どこに浴びせているか、「中国総領事館」に、である。

あるんですよ、

最寄りの駅名で、総領事館の所在地は鞆本町なのだが、この辺の人は、「どこに住んでいるのか？」と聞かれたら、「阿波座」と答える。だから阿波座だ。総領事館があると聞けば、私は治安のいい、高級住宅地を連想してしまって（これは多分、大使館と混同しているせいだ）、中国総領事館は違う。とうか、阿波座は違う。総領事館の斜め前にあるのは、スーパー・マーケットの「ライフ」。二階建てで、「ライフ」の

なかでも小さい規模のスーパーで、私を含め近所のおばちゃんが自転車で買いい物に来る、食品がメインのスーパーだ。ほかには老人専用の介護施設やマンションやらパン屋さんやら美容室がある、大阪の、「こくこくありふれた町」の一角に中国総領事館は建つてある。一日二四時間、警察が護衛をしていて、コンテナのような車がピタリと領事館の脇に止まっている。要所要所に

「ここ」に向けて、街宣車が集結し、大音量のシユプレヒコールを繰り返す。「中國、出て行け」と。いまどき、シ

ユプレヒコールなんて古いし、そもそも猪の首のおっさんがだみ声を張り上げて、拡声器で「中国、帰れ！」などと叫んでいる状態を表現する言葉として、シユプレヒコールは変だ。自分で使つていてなんだけど。

「ここで、お断りしておくが、私は言論の自由は認める。おっさんらのパンチ。」
「一マか角刈り」という髪型その他存在自体をいただけない、嫌いだとは思うが彼らだって私のことを知つていれば「はつ、ブサイクなオバハンがモノ言うな空気吸うな」と、まあそういう思うでしょから、お互い様だ。

問題は言論になつていらない、というふとだ。がなりたてて、わめきちらしているので、何を言つてるのか、わからないのだ。うそだと思う人は、阿波座に来ていつぺん聞いてほしい。

厳密に言うと、拡声器で流す演説（）応、そう言つとくが、実態は絶対に演説ではない）には三種類ある。「（一）近所の皆様にはご迷惑をおかけしますが、尖閣諸島における中国のこのような暴挙を我々はあ、許すことができないのであります」と、理路整然、聞き取れるヴァージョン。これだけならまったくの言論の自由。二種類目、何を言つてるんだか最初から最後まで本当にさっぱり聞きとれない大騒音。三種類目、聞き取れと言葉が混じる、罵詈雑言。「何が、うる

さいじやうこつらう」「殺すぞくう」。勇気ある住民や中国領事館を警護するボンクラおまわりども（あ！失礼。でも、全然、制御してないから、ボンクラ呼ばわりされて当然だ）に向けられている言葉が家の中に居てもがんがん響いて聞こえて来る。警察は、この騒音を取り締まらない。領事館に近づけさせないようにガードはしているけど。

これが無法地帯でなくてなんだとうのだ。ボンクラではない警察官がたまにいて、小競り合いを起こしているが、全体を取り締まることはない。

何年か前の夏、私は自転車に乗つていて、たまたま一台の街宣車の窓が開いていたから、「やがましい！ ここには病院もあるんですよ、静かにして下さい」とどなつたことがあつた。思えば、無謀である。車の中には三、四人乗つていて、明らかにびっくりしたらしく、「やかましいと言うとおんぞ」と顔を見合わせていた。意外に、普通の反応だったが、報復を恐れた私は、そのまま自転車で走り去り、ライフに逃げ込んだ。住まいを知られたくなかったからだ。本当は、追手もかららなかつたが、用心にこしたことはない。

阿波座に住むつて、
ングなのだ。(AO)



お詫びと訂正

「芥川だより」75号の3ページ目、下から2段目の一番最後の行の「いくつか手前の駅で」から一番下の段の9行目の「社長にらむ」まで、編集のミスで読みにくくなっています。訂正しお詫び致します。

<訂正文>

とカン違いして、いくつか手前の駅で下りてしまつたという、ささいなおつちよこちよいが原因だ。マヌケである。でも、この瞬間ににおいては、おのれのマヌケを呪つているヒマはない。

タクシーで山道をうねうね走つて、米子まで、1万6千円。もちろん、自腹。会社が出してくれるのは、大阪—米子間のJR料金のみ。一応、領収書をもらい、社長に「手前で、降りちゃいましてね」と説明しけたが、「そりやしゃあないな。ご苦労さん」と、交渉を打ち切られた。

おつちよこちよいは、本当に苦労する。お金も貯まらない（これは、別の問題があるかも知れない）。ときには、命の危険もばらむ。

ぼけ防止のために

明石 幸次郎

A君 「明石さん会社辞めてから今、何をしてますの？」

明石 「まあ、卒業してからずっと勤めていた会社を、思うところがあつて、早い目に辞めて、ブラブラしていたんやが、今は、その会社にいた後輩が脱サラして、会社を興し、売り上げが増え、自分一人では手が回らないので、頼まれて手伝つているんや。給料〇分の1、反対に責任〇倍、しんどさ〇倍やで。女房曰く、『以前の会社に居た頃に比べ、ずっと真剣に働いて、家に帰つて来たら疲れ切つてしんどそうやね。前の会社でもつと真面目に働いていたら、楽して良かつたのと違う』と皮肉られているんやで」

B君 「何でまた、エエ歳してから、そんなに真面目に働き出したんですか？ それやつたら、以前いた会社で定年までサラリーマン道を、真面目に全うした方が奥さんの言われるようにホンマに良かつたのと違いますか？ 後輩の会社を手伝うと言つて、足引っ張つて、その後始末でしんどいのと違いますか！」

明石 「エエ恰好で言う訳やないが、

こそ面白くもない仕事を自分で曲げて無理して定年まで続けていれば、ストレスが溜まり、それこそ定年になつた途端に癌が発見され体調を崩して、あの世行きとなつてゐるのと違うかなあ。早く辞めたお蔭で？ ストレスも溜め込みますに、前の会社で出せなかつたエネルギーのようなものが溜まつていて、それを今の会社で吐き出しているのかも知れんわ。まあ、俺もこの歳になつたので、少しは考えてから行動しているわ。使命感というものが、勝手に思つてゐるのやけど。まあ、後輩の足を引っ張る前に辞めるつもりやけど

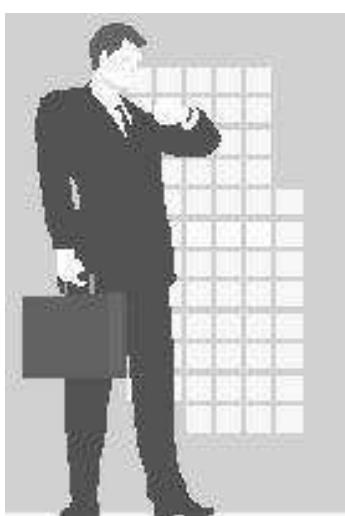
A君 「ところで、S先輩が明石に会つたら、芥川だよりにまた寄稿するようになつたので、と言つてましたよ。『俺が言つても、分かった、分かったと云いながら、もう、4か月も経つてるのに、全然原稿出して來ないんや。アイツなら、サラリーマン人生で、沢山の失敗をやらかし、会社に言えない話を秘めているはずやで。それを吐き出したら、すつきりすると思う。アイツのためにも書いた方がエエと言つておいてくれ』と言われてましたよ。そう言えば三十歳代で十年位海外の仕事をされていましたね。S先輩が期待している面白い話があるのと違いますか？」

う何年ですか？ 早く失敗談を書かないで待けて書けなくなりますよ。呆け防止のために毎月義務的に、面白くない原稿を書くのも明石さんらしくエエじゃないですか。誰も明石さんが書いたものなんか、読みませんよ！」

明石 「まあ、それもそうやなあ。ストレス予防のために、後輩の会社で働かせてもらい、その上、ぼけ防止のため、下やんに原稿を書かせてもらう、有難いことやなあ。来月から書くので、君ら、芥川だよりを来月号を百部づつ買うことと、これからは、原稿の督促がてら、酒を飲みに行こうと毎月誘つてくれや」

B君 「S先輩はどうします。難病を患い、大変なようですね。酒なんか誘つても来られないのではないですか？」

明石 「何を失礼なことを言つてるんや！ 下やんが酒を断るのは、余程の時やで。断る訳はない。まあ、断わつた時は、覚悟しておかないといかんなあ」



4. 28 政府「主権回復」式典と沖縄「屈辱の日」大会

4/29の朝日新聞朝刊にはこんな見出しでそれぞれの集会が対比されて記されていて朝日もがんばっているなと感じました。「61年前の4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効し、アメリカを中心とした連合国が占領から脱した。沖縄、奄美、小笠原はそのままアメリカを中心とした占領下におかれた」と説明がありました。しかし現在日本が本当に独立国として存在しているのかというと首をかしげたくなります。ある友人は日本は将来アメリカの州になるか、中国の属国になるかどちらかだと究極の選択を言っています。沖縄の集会では土地を基地に取り上げられ、アメリカの基地がのさります。スピーチされていたが、その通りだと思います。2年前に自民党で4月28日を主権回復記念日にする議員連盟がつくられ、その趣意書には「主権回復した際に、本来なら直ちに自主憲法の制定と国防軍の創設は主権国家として最優先課題であった」とあるそうです。主権喪失の時代に押しつけられた日本国憲法を占領憲法として変えたいねらいが見えます。

見出しでそれぞれの集会が対比されて記されていて朝日もがんばっているなと感じました。「61年前の4月28日にサンフランシスコ講和条約が発効し、アメリカを中心とした連合国が占

べき事だと改めて思いました。
(熊吾郎)

システム的に！と叫んでみれば……

大江雉兎

伸ばしたのが最初だった。

かし現在日本が本当に独立国として存

在しているのかというと首をかしげた

くなります。ある友人は日本は将来ア

メリカの州になるか、中国の属国にな

るかどちらかだと究極の選択を言つて

くになります。ある友人は日本は将来ア

メリカの州になるか、中国の属国にな

るかどちらかだと究極の選択を言つて

きますが、なぜ主権回復の日を持ち出してきたのかが見えています。これだけアメリカのいいなりになつてゐる日本の現状を直視し、独立国として当然の要求をしていくのが今の政府のやるべき事だと改めて思いました。

(熊吾郎)

国防軍の創設も入つてることに驚いて否定しているようだが、実は逆であります。初めて読んだのは『1973年のピンボール』で、続いて『風の歌を聴け』と『羊をめぐる冒険』。それらの作品が話題となつた時期が過ぎて文庫になった段階のことである。書店の文庫コーナーで、そういうえば数年前にそんな名前の人があつた程度のノリで手をがするな、といった程度のノリで手を

伸ばしたのが最初だった。

誰とは言わないが、たとえば「平成の三島由紀夫」とかのキャッチコピー

をかぶせられ、作られたブーム臭さぶんの中でもてはやされた某作家な

ども、その作品を読むには読んだが、

響くものは何もなかつた。そうしたタ

イプの「大型新人」が多い中で、『1973年』と『風の歌』は明らかに風合いで違つていた。あの独特の文

体にはすぐに毒されてしまつたのであ

る。ただ、それでも、だからといつて、

ノーベル賞がどうたらとか、発売前に増刷がなんたらとかの騒動を聞くと、

うすら寒いものを感じてしまう。基本的には好きな作家で評価もしているの

だが、付かず離れずのほどよい距離感

を保つていてほしい存在なのである。

といった具合で村上春樹論議から切

り出したのは、なにも新作のことをあ

こうしたことを書き始めると、まるで取り上げた「システム」なる言葉を考えにあたつて、村上春樹の発言が重要な役割を果たすことになるからである。少々回りくどかつたが、村上春樹が気になる作家の一人であり、それがゆえに彼の発言が小骨のよう引つかかってしまうのである。そもそも「システム」とはどういう意味なのだろう。システムキッチンだの、システム手帳だの、さまざまな分野でいろいろな使われ方がされているだけに、実例から切り離してしまふとわかりづらい。「システム」とは？とだけ問い合わせられると、気の利いた答えは出てこないということだ。それで、部分と全体のイメージで議論されるものらしいことぐらいは想像できる。

たとえば自動車のパーツであるエンジンやタイヤなどに注目しながら、自動車という商品全体を議論する時に、"システム"やバランスが取れて"などのフレーズが自然なよう。あるいはこむつかしい経済の話。工場での生産ラインだつたり、流通業界の効率主義だつたり、はたまた消費の動向などなど、個別に扱つてもそれだけで日が暮れる議論になるのに、そこに加えて相互関係まで目配せすれば、"現代の経済システム"では、"云々といった発言が飛び出したりする。

それはさておき、おもしろいのは、こうした使われ方から、なんとなくの雰囲気はわかつても、多くの論者に共通する見解が

あるように思えないことである。いざ立ち止まって考えると「はて、どういう意味だろう？」と頭をひねってしまうことが少なくない。元来は厳密な定義が求められる専門語なのだが、日常的に使われるものだから厳密さが意識されなくなつたからだろう。誰もがわかつてゐるつもりで、軽く「システム」云々と口の端に掛け、そして誰もが厳密なところを曖昧にしたまま、「そうだ、そうだ、システム的にそうなんだ」としたり顔で頷いてしまう。私も、そんな知つたがぶり族の一人だが、そんな私でさえ妙な違和感を覚えたのが村上春樹の発言だつた。いや、厳密にいうと、村上の発言と、それからほどなくして聞くことになつたとあるフレーズとの合わせ技である。

を殺し、さらに私たちに他者を冷酷かつ封果的、組織的に殺させ始めるのです」。
もう一つはそれから二年後のことである。福島の原発事故に際して官邸が最前線に介入したことについて、某ニュースキャスターが口にしたコメントである。キャスターは、混乱を増幅させたとする批判による擁護の両方に触れたうえで、「今回のニュースがどうだったというより、対応する人物によって結果が左右されるというのはどうでしょうか。非常時に安定した対応が可能となるシステムの構築が急がれます」といった趣旨の発言をしたのである。

であるように言い、他方は複雑な事態を一義的に解決する必要な手段として「システム」を求めているのである。同じ言葉が正反対のニュアンスで使われているわけだ。多様かつ複雑な内容を含む言葉なのに、雰囲気的なところで使えてしまうがゆえに、こうした矛盾が起こつてくるのだろう。

もちろん、村上発言であつても、キヤスター氏のものであつても、長々しい説明をつければ整合性は出てくる。しかし世の中は悠長な応対を望まない。感覚的に、あるいは特効薬的に、はたまたヒステリックに物事に黑白をつけたがる。だからこそ耳に飛び込んでくる響きのカツカツよさに左右される。発言する側からいえば、明快に大声で断定した者が勝つ。「システム」という言葉がもてはやされるのも、そんな傾向が少しおかげで関係しているようと思う。この「システム」の他にも、厳密に考えればどうなんだろうという疑問符がつく言葉はたくさんあるが、「言居士の戯れ言めいてくるから」のあたりで切り上げておこう。

当部の部員の一員

豪州時代2
('86年10月～'90年5月)

吉田
裕

豪州時代2（'86年10月～'90年5月）

当部の部員のこと

物資木材繊維部の邦人社員は私を含め四名。本店物資部、大阪物資部、本店木材部、大阪繊維部からそれぞれ一名ずつ派遣されていた。

シドニー店で物資部商売を担当していたK君は神戸大農学部出身。毎日、同じ部屋で仕事をしていた関係で否応なく彼のプライベートな問題にも巻き込まれる羽目となつた。私より一年前に着任していたので現地には慣れており、社宅への引っ越しを手伝つてもらつたり、休みには一緒に釣りに出かけたり、お互いの家族を招待したり、親しく付き合つていた。

ある時、彼が「お婆さんが危篤になつたので一時帰国させてほしい」と言つてきたので、すぐさま社長許可をとつて帰国させた。その時はなんら疑問を持たなかつたのだが、約一ヶ月後、夜遅く彼の奥さんが拙宅へ来て「主人が暴れるので一晩泊めてほしい」と言う。女同士の方が話しやすいので女房が事情を聴いたところ、K君には大阪に彼女がいて、先般、日本に一時帰国したのは彼女に会いに行

つたのだという。

彼女と一緒にになりたいので奥さんに「早く日本へ帰れ」と無理を言うらしい。もちろん奥さんはOKしないので、時々大荒れになるのだと。

翌朝、彼が会社へ出勤した頃に、奥さんには家へ帰つてもらい、私は夜、彼をホテルのバーに呼んで事情を聴いた。奥さんを先行帰国させたい理由をなんとかんだと説明していたが、全く説得力がない。いわく「女房は二年間の約束でシドニーへ連れてきた。もうそろそろ二年たつので、帰らせたい」という。彼には中二と小五の男の子がいて日本人学校に通っていた。奥さんとは高校時代から付き合いで、奥さんは「あの人はずのところに帰つてくる」と自信満々にうちの女房に言つていた。

それから一年後、彼の希望通り、家族を先行帰国させたが、本社の人事部は單身赴任を認めず、半年後彼も帰国することになり、シドニー店物資木材織維部の邦人社員は私だけとなつた。

後日談だが、彼が帰国して数年後、件の彼女が他の人と結婚したため、彼は元のさやに納まり、一人の男の子も早婚で孫もできて今はハッピーな人生を送っている。

メルボルン店のO君は本社の木材部からウッドチップ専門で派遣されていました。三井物産木材部は歴史が古く、北海

道を中心に広大な社有林を保有している昔は相当な利益をあげていたと思う。近年は、日本の森林は間伐材以外は伐採できないため、輸入木材を扱っていたが、これもマレーシアなどの产地が丸太の輸出を禁止し、製材でしか買えぬようになり、採算が合わないため、木材部は社有林の管理に専念していた。

同君は北大農学部林業科出身で木材のエキスパートであった。豪快な性格でタスマニアの山男達とも仲良くなっていた。タスマニアでの荷役立ち合いは暇な時間が多いで船で釣りをしたり、バーべキューをしてワילדライフを楽しんでいたようである。三井では珍しく上昇志向がなく、年に一回の人事調査票に次の転勤希望地として鹿児島支店かインドネシアの僻地にあるKTC(製材会社)を挙げていた。実際、三年後にインドネシアに転勤となり山蛭に噛まれながらの二年間を過ごすことになった。

メルボルンで織維を担当していたH

君は京大経済卒、頭脳明晰、如才ないタイプでO君とは対照的な都会人であった。豪州の織維業界は年中温暖な気候のせいもあって安物志向で、日本製では競争力がなくマレーシア、香港、韓国などからの輸入品を扱つていた。

市場が小さい割に競争が激しく利益率も低かった。彼は大阪支社からの転勤なので次の勤務地に東京本社を希望していたのだが、大阪支社としては後任を大坂から出す関係で大阪へ戻すよう要請あり結局、大阪支店へ帰任した。

元豪州物産社長で後に本社の社長になつたE氏の発案で現地の大学生に奨学金を出して日本に派遣し、企業研修を行つた。毎年十名前後の大学生が日本に派遣されていたが彼らの中で豪物に入社したのは極少数で、私が着任時に残つたのは二名だけで、それも入社後二〇年位経つており、最近は全く入社して来ないようであった。

これは他の海外店にも言えることであるが、現地職員と邦人職員の職制が異なり、彼らは部長などの幹部職になれないのである。豪物社長の権限で前述の二名は名前だけは業務部長として待遇していたが、営業ではないので権限もなく、毎日、豪州の有力紙の経済記事を抜粋して営業部に配信するのが主な仕事のようであった。

月に一回、大洋州部長会議が開かれ、豪州四店だけでなくニュージーランド物産社長、パブアニューギニアのポートモレスビー所長(英国人)なども出席していたが、社長がS氏からT氏に代わつてから、前述の現地人部長のために会

議は全て英語でやろうということになり、日本人同士が英語で議論するという妙な雰囲気の会議となつた。

現地職員については、シドニーのピーター・アーバークリンバーとメルボルンのウイル・マークリンクはオランダから移民で松下のコンプレッサー担当であつたが、なかなかの商売人で松下が度々値上げを申し入れてきて、商売継続が危なくなつたときも粘り強く交渉して注文をとつていた。人懐こい性格で私は買つていたのだが、私の帰国後数年してある不祥事で会社を辞めたと聞いた。

ピーターはBSタイヤ、コンベアーベルトクリーナーの担当であつたが、両方とも特定の客先向けしか商権がなくじり貧であつた。さりとて開発商売を担当する能力もなく、物産の海外店にはよく居るタイプであった。彼は後に私が大阪の物資部長だった時に豪物を辞めてコンベアベルトクリーナーの代理店に転職し、日本に出張してきた。

